テキサスの日系人

知っておきたいジャパニーズテキサンの伝記　その①

ドナ・フジモト・コールさん
＜前編＞

現在、テキサス州内で日本人が一番多く暮らすヒューストン。永住、駐在と滞在資格は様々ですが、居住の権利や自由を脅かされることなく過ごしています。しかし、日本人が今のような生活ができるようになるまでには、たくさんの日本人移住者の努力と戦いがありました。BLMに端を発した抗議運動により、人種差別への問題意識が高まっている今、あらためて日系の先人たちが進んできた道のりを振り返ってみたいと思います。

ガルフストリームでは、ヒューストンの日系人の方々にスポットをあて、その生き方や考え方を紹介していきます。COVID-19の影響で世界中が今までとは違う「新たな日常」「新たな価値観」を見出す必要性に迫られている中、これから進むべき方向を決めるヒントがあるかもしれません。

第一回は、2017年からヒューストン日本商工会の会員になったコール・ケミカル社のドナ・フジモト・コール社長のお話です。　（文責：佐藤暁子）

▲若かりし頃の母メリーと父ジョージ

ドナ・フジモト・コールは、1952年にコロラド州デンバーで生まれた。コロラドで家族の農園を手伝っていた日系2世の父ジョージは、第二次世界大戦が始まると1942年にアメリカ軍に従軍し、第442連隊戦闘団第100歩兵大隊に所属。この日系人部隊の功績は大きく、2011年に米国で最も権威のある勲章の一つ「議会金メダル」が授与され、ジョージも受賞者のひとりとなった。戦争中に負傷したジョージは入院中、病院に慰問に来た日系2世のメリーと出会い、後に結婚。戦後、コロラドに戻るが、耕作効率が良いと誘われてテキサスのリオグランデバリー（マッカーレンの西）に農地を購入して移住した。ドナ、生後6か月の出来事である。

●「どうしていじめるの？」から「どうしたら仲良くなれるのか？」へ

―どんな子ども時代を過ごされましたか？

「私は1年から5年までをミッション（マッカーレンの西の郊外）の小学校で過ごしたんだけど、クラス25人のうち日本人は私だけ。あとは白人とメキシコ人で、ジャップと呼ばれたり、私を見ると目尻を引っ張って見せたり、いつもいじめられていたの。だから、休み時間はいつもみんなから隠れていたものよ。特に、11月頃になると、第二次大戦の真珠湾攻撃の映画を学校で見せるので、学校に行くのがとても嫌だったわ。」

▲小学2年生のころ

―大戦が終わってから既に15年近く経っているのに、なぜそんなにいじめられたのでしょう？

「それは、日本がアメリカの敵国だったからよ。映画を見せられたり、中には家族の誰かが大戦で日本軍と戦って亡くなっていた人もいたかもしれない。親が教えたりしなくても、子どもたちは自分たちで『日本人は敵だ』と思っていたのよ。

でも、みんなから意地悪をされたり悪口を言われた時、私は言い返したり仕返しをしようとは思わなかった。その代わり、『どうしたら友達になってもらえるんだろう』『どうやったら自分を好きになってもらえるんだろう』って考えたの。それで、そういう人たちに、たくさん質問をしたわ。その人を知ろうとしたの。そして、その人が私について質問してくれたら、私も自分の事を話す。見た目ではなくて、私がどういう考えを持っているかを知ってもらえば、仲良くなれると思ったから。私はそうやって友達を作っていったし、それは今でもとても有効よ。」

ドナが6年生になった時、家族はマッカーレンに引っ越した。マッカーレンには日系人6家族が住んでおり、San Benitoに建てられた日本人クラブハウスは、リオ・グランデ・バリー在住の日系人たちの集会所となっていた。また、ドナは土曜日には日本語学校に通うようになった。

―日本語学校はいかがでしたか？

「好きじゃなかったわよ(笑)。お弁当と手芸と踊りは楽しかったけど。両親とは英語で話をしていたので、私は日本語が話せなかったし、せっかくのお休みの日に学校に行かなきゃいけないなんてまっぴらだった。でも、両親は、他の日本人たちと会えるので、楽しそうだったわね。」

―他にはどんなことをやっていましたか？

「6歳から12歳まで、ガールスカウトに入っていたの。他のメンバーは白人ばっかりだったけど、ここではいじめられることはなかったわ。みんなで協力していろいろなことをやらなくちゃいけなかったからだと思う。キャンプやボランティア活動のために、想像力を働かせて必要なものを用意したり、新しいやり方を開発したりしたわ。順番にリーダーの役をやるので、リーダーシップを学べたし、自分に割り当てられた仕事をするためには独自の創造力が試されたわ。…今考えると、人生と会社の経営に必要なリーダーシップスキルをここで学んだわね。」

「それと、私が1年生の時、フットボールのハーフタイム中にテレビでバトントワラーを見てね。それで、私もやりたいって言ったら、両親が競技会に出られるようにトワーリングスクールに行かせてくれた。でも、7年生のとき、高校のバトントワリングチームに入るには、バンドに入って何か楽器をやってないと試験を受けさせてくれないって言われたの。兄がクラリネットをやっていたので、私もクラリネットを練習して、ようやく入部試験に合格してバトントワラーになれたわ。その10年間の経験から学んだのは、目標を設定し、それを達成するための努力をすれば、障害を乗り越えて、最終的にそれを達成できるってことよ。」

▲念願のバトントワラーに

(9月号に続く)